人と情報機器の関係

村中　稔

▲写真1

はじめに

社会環境の変化や技術の進歩に伴い情報というものはますます私達の生活と密接な関係を持つようになってきた。単に情報といっても様々な種類があるわけで、それらを総括することは非常に困難であるといえる。そこでいくつかの情報機器の例をあげて、人々の生活と情報の関係を考えてみたいと思う。今回はすでに商品化されているものと、提案作品の両方をサンプルに考察してみたいと思う。

1．近未来の情報ターミナル

情報基盤が整備されて、様々な情報端末機器やコンピュータなどが各施設や公共の場所にはいりこもうとしている。情報機器は以前に比べると非常にアクセスしやすくなってい

て、自分の欲しい情報が手に入りやすくなったといえる。これまでの情報の流れをみると送る側と受ける側という立場が、わりとはっきりしていた。しかしこれから多くの情報を短時間で、しかも互いに確認しながら行う多方向のインタラクティブコミュニケーションが主体となるであろうと予想できる。

1）秘書ターミナル（提案作品）

今後ますますサテライトオフィスや個人的な立場で仕事をするマルチワーカーが増えるのではないだろうか。そのような環境では、どうしても自分の手足となる有能な秘書が1人欲しいところである。留守がちな事務所と外出先をつなぎ、よりスムーズに、気持ちよく仕事が進められるように秘書業務を代行するのである。全体のシーンイメージとしては、**写真－2**に示すように留守がちな事務所にメインターミナル。電話の取り次ぎ、FAX送受信の他にスケジュール管理や出張手配もしてくれる。また外出時には携帯ターミナルを持っているのでメインターミナルからは新しい情報が整理されて入ってくる。さらにプライベートな外出時には最低限の情報が確認でき、しかも携帯にじゃまにならないような、ブローチタイプやブレスレットタイプのターミナルがサポートするのである。事務所設置用メインターミナルは使いやすさを考慮して、音声認識による対話式で情報のやりとりができる。またそのやりとりをサポートするのが画面の中に登場する秘書である。秘書のタイプは自分で選べ、長い間つきあっていくうちに自分の性格や調子なども理解してくれる。従って使えば使うほど、お互いの関係が良くなっていくのである。　**（写真－3）**

2）プレゼンテーションターミナル

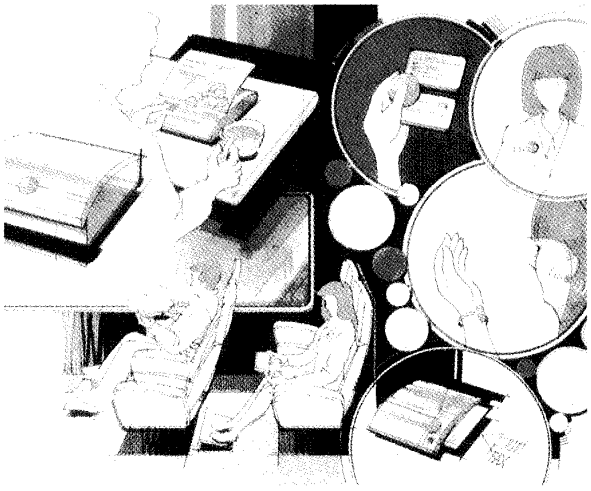
（提案作品）　**（写真－4．5．6）**

プレゼンテーションで使用されるコピーやOHP。言葉だけでは伝わらない電話。自分の意志をリアルに、強烈に伝えたいと思うことがある。そんな時に動画による情報がサポートしてくれるのである。現在のビデオカメラシステムやテレビ、コンピュータなどは、それぞれ単独の機能として使用されているが、それらを統括したものとしてプレゼンテーションターミナルが考えられる。このシステムとしては、マルチコントロールユニット、ビデオプロジェクタやビデオカメラがある。これらの機器は共通の操作性と情報伝達システムを有する。カメラのビューファインダー部**（写真－4）**は本体から独立するので映像を確認しながら、様々なアングルで撮影できる。

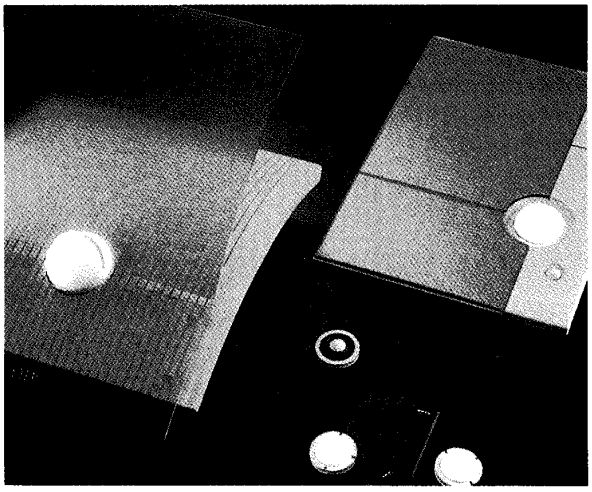
2．ファクシミリの研究及び提案

近年ファクシミリの需要はオフィスから店舗、家庭へと広がっている。ファクシミリは紙に書かれた情報を電話回線を利用して、ど

▼写真2



▼写真3

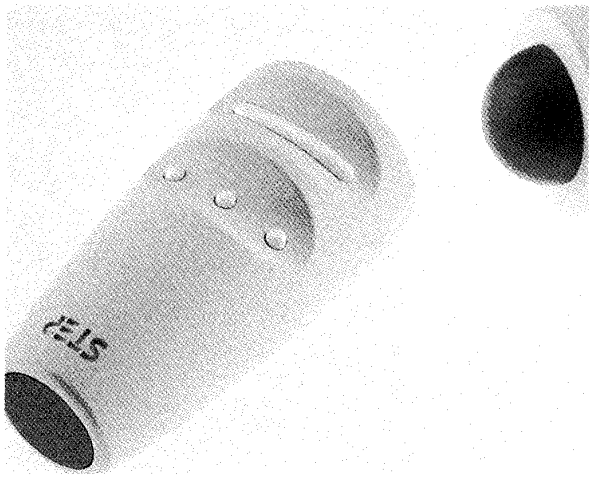


こにでも手軽に送れるメディアとして高く評価され普及している。しかし使用目的や使用環境などを考えると、ファクシミリのデザインはこれからも変化してゆくものと思われる。目的別ファクシミリについて考えてみる。

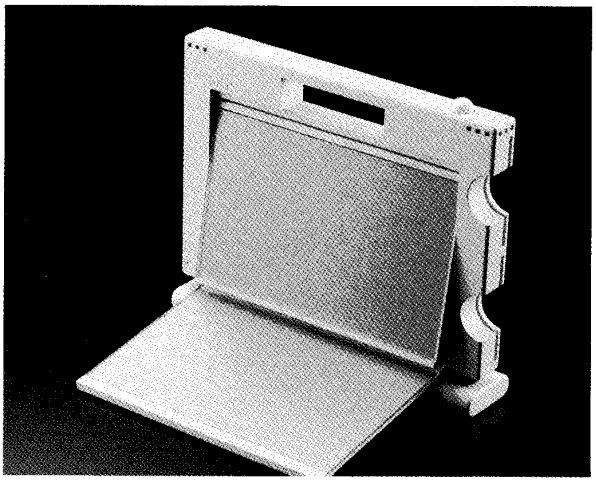
1）家庭用ファクシミリ — ノートファクス

現在主流のファクシミリのデザインは、本体手前部分に操作ボタンが並び、左側面に電話機のハンドセットがついているものである。

（写真－7）



▲写真 4



▲写真 5

▼写真 6

それに比べてノートファクス（**写真－8**）は家庭で使われるように企画され、学生や若者向けにデザインされたものである。コンパクトにまとめられ、どこにでも気軽に置けるように配慮されている。このように個人のニーズに対応するものづくりが今後ますます主流となってくるに違いない。

2）小型ファクシミリ（提案作品）

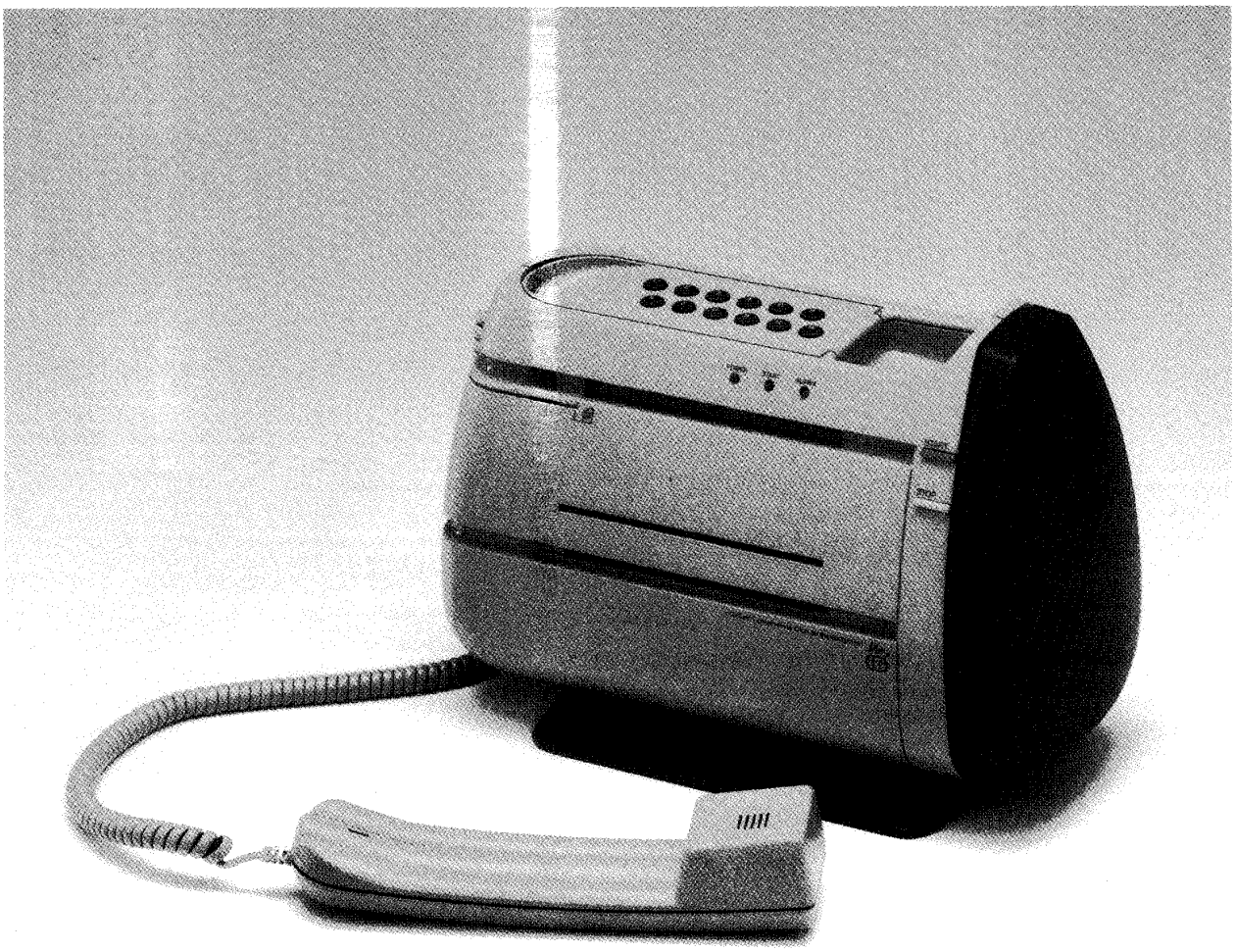
やはりファクシミリは使用環境を意識してデザインされていなければならない。たとえばブティックやカフェバーなどのようにイメージを重要視するような場所では特に外観イメージが大切である。このような環境では機能以外にも求められる要素があることに注目しなければならない。（**写真－9**）

3）手書きファクシミリ（提案作品）

友人と電話していて言葉だけではどうにもコミュニケーションできない時がある。そんな時に筆談を交えて会話できると便利である。

▼写真7

▼写真8



この手書きファクシミリは専用ペンで本体上部の入力部に伝達したい内容を書くだけで、相手入力部に同じ内容が写し出されるというものである。もしそれが必要な情報ならば、紙に印刷することもできる。このように送られてきた情報を選択し、必要なものは残しておける選べる機能は必要である。**(写真－10)**

4）オフィス用小スペースファクシミリ
（提案作品）

オフィスに設置されているファクシミリは本体と紙受け部分で多くの専有面積を必要とする。このファクシミリは自立型で、場所をとらずにどこにでも気軽に設置できるように考えられている。　**(写真－11)**

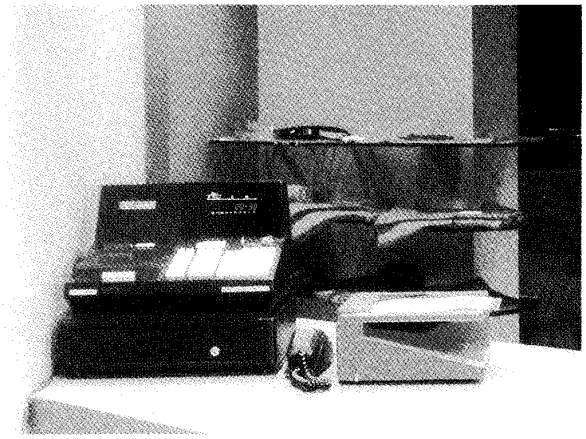
3．身につける情報機器（提案作品）

ハイテクノロジーと高度過密実装技術が、情報機器の超小型化を可能にした。人と情報機器の間には距離があったが、その距離は縮まり、やがて情報機器を身につけるまでになる。情報機器を身につけるなどというのは非常にやっかいなことではあるが、その反面便利なこともあるのではないだろうか。

1）ウェアカム

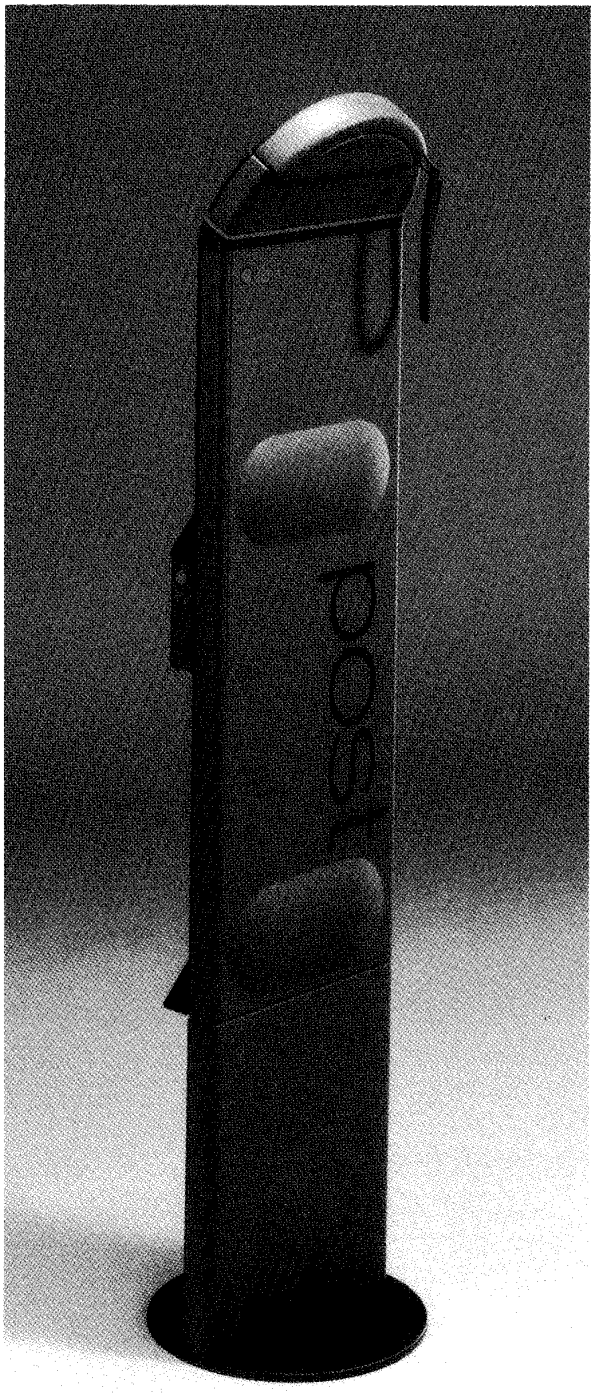
スポーツや取材など動きの速い場所で、様々

▼写真 9



▼写真10

▼写真11



なアングルでクリアな映像が記録できるシステムである。左腰部にあるボールを回してカメラのアングルを操作する。　**(写真－12)**

2）ウェアラブル・ハンディターミナル

腰の部分に情報機器を装着することで両手が自由に使えるようになる。また入力用の専用ペンを使用して、ストアーなどの商品の在庫管理などがスムーズに行える。**(写真－13)**

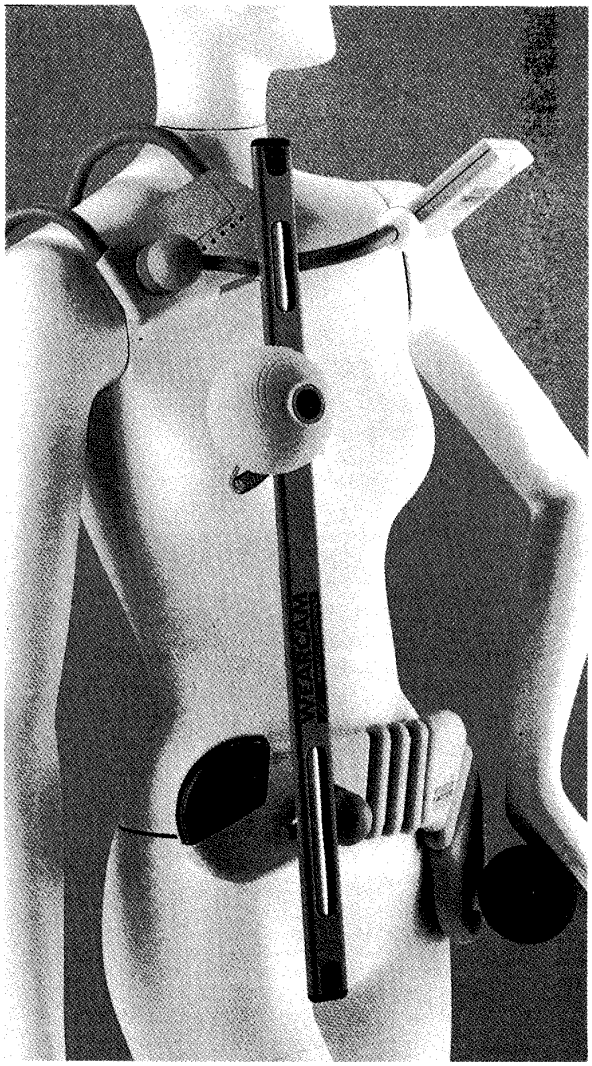
3）スプーン

オフィスで使いたい場所に持っていって、膝の上に折り曲げて使う。　**(写真－14)**

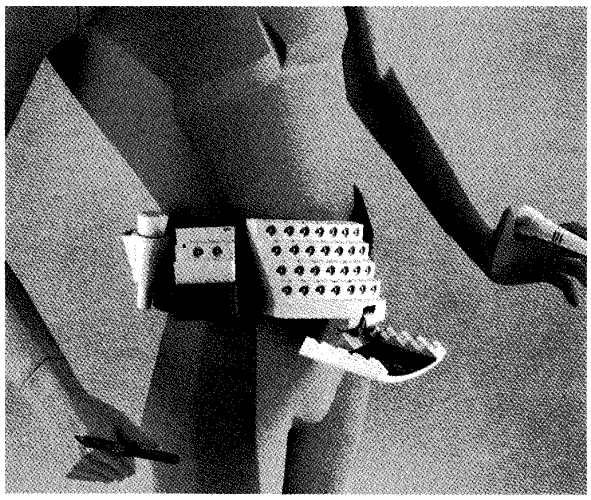
4．パーソナル情報ターミナル（提案作品）

情報機器がパーソナルユースに近づくほど、人々は自分にぴったりのフィーリングを望むようになる。極端に言うと他人に使ってほしくない。自分だけが使えればよいというような分野ではないかと思う。このような個人向けの情報機器は、ありとあらゆるかたちが考えられるが、ここでは２種類の機器を紹介し

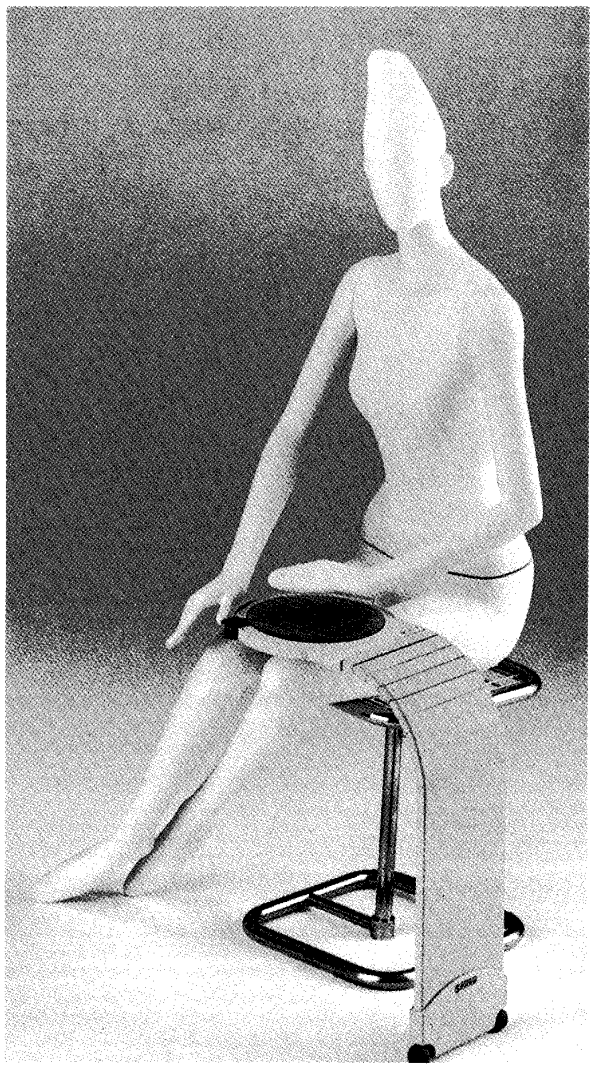
▼写真12



▼写真13



▼写真14



たい。

1）動画テレビ電話機

情報機器を扱うという気持ちではなく、気軽にハンバーガーを食べるような気持ちが形に表現されている。情報機器が持っているどこかかた苦しいイメージを消そうとしたものである。本体右上部にはスティックがついていて、そのスティック1本ずつが電話をかけたい相手となっている。　**（写真－15）**

2）複合コミュニケーションターミナル

ファクシミリ機能がついた留守番コードレス電話機でAVシステムを操作できる。

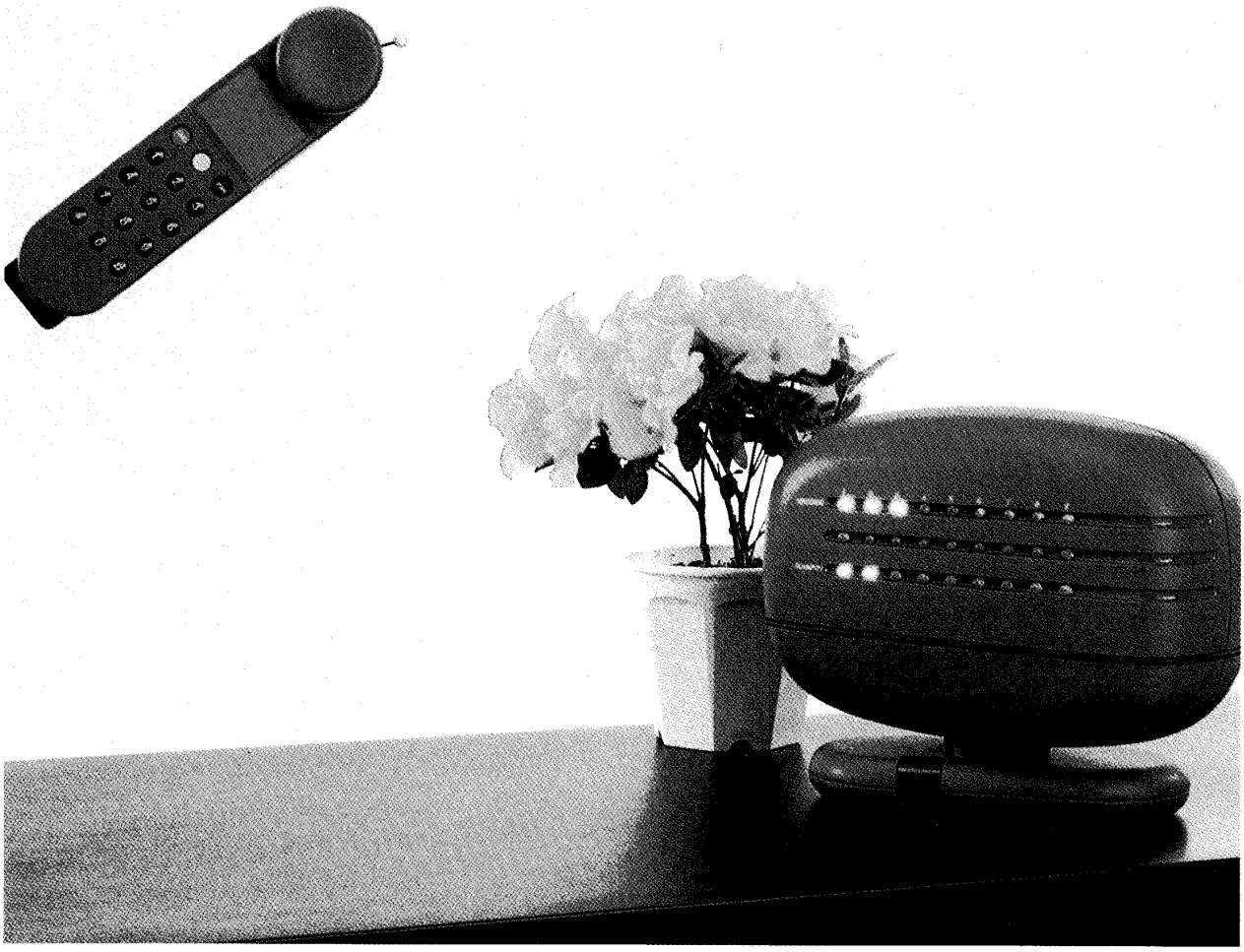
（写真－16）

情報機器発想へのアプローチ

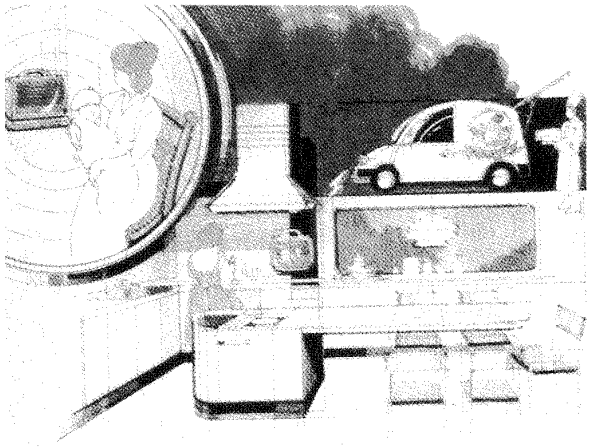
情報機器を考える場合、どこで、誰が、どのように利用するかということを明確にし、そのうえで使用するシーンイメージを描いてみると、その姿が少しずつ見えてくる。そのうえで実際にシミュレーションしながら、本

▼写真16

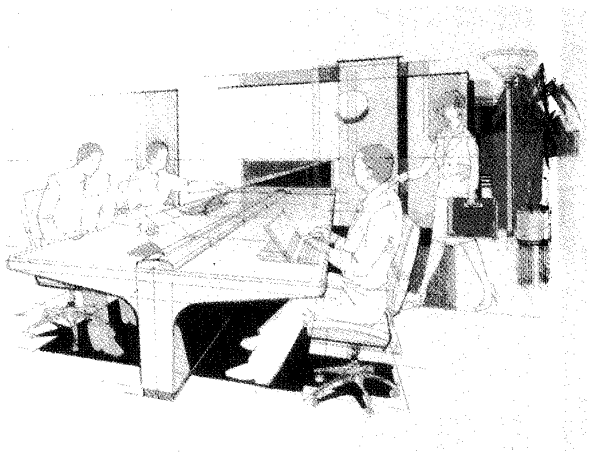
▼写真15



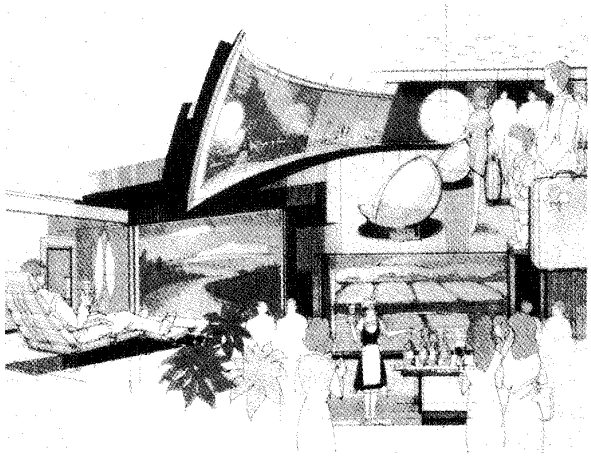
▼写真17



▼写真18



▼写真19



当に必要なものかどうかを検証していくのである。　**(写真－17.18.19)**

おわりに

私達を取巻く環境は日々変化している。つまり情報も変化しているわけである。また人々の感覚も日によって、時間によって全く異なったものになりうる。このように変化の激しい環境の中で、今後情報機器はどうなっていくべきなのか。現時点では誰もわからないが、早期において研究を行い、あるべき姿を描いていかなければならない。情報機器が勝手に進歩を続け、人間とは縁のないものにならぬよう考えるのは私達なのである。

参考文献／写真

日本電気株式会社
　ステッププロジェクト
株式会社日本電気デザインセンター
　C＆Cウェアラブルターミナルの研究

（平成３年10月15日受理）